

三郷市立瑞木小学校いじめ防止基本方針

令和8年4月

はじめに

本校では、目指す学校像を「本気・元気・夢いっぱい」～笑顔あふれる瑞木小～、目指す児童像を「自ら学ぶ子」「思いやりのある子」「進んで運動する子」とし、三郷の教育「四つの礎」を推進して、特色ある教育活動を展開している。

「自ら学ぶ子」では、授業の基盤である「授業の心得」を全学級に掲示し、授業の開始や終了のあいさつなど共通理解の基、教員一人一人がわかる授業を心掛け、児童に基礎・基本の定着と活用力の育成を図っている。また、家庭と連携し家庭学習を充実させ、児童に基礎・基本の定着を図り、学力向上を目指している。多くの児童はこの取り組みの結果、落ち着いて学習に取り組んでいる。

「思いやりのある子」では、児童一人一人が自分のよい所を伸ばし、他の児童を認め合うなど自他を認め合う教育を推進している。考え、議論する道徳の授業づくり、友達の良さを認める「心の木コーナー」の取組、「みずっきー班」での遊びの異学年交流を通じた異年齢への思いやりの醸成など、学校教育活動全般、学年・学級の取組を通じて、よさに気づかせ、認め合う関係づくりを行っている。また、読書活動では、図書館司書と連携して学校図書館の利用計画を立て、積極的に活用し、児童に読書の楽しさ、知る喜びを伝え、心豊かな児童の育成に努めている。毎月23日を家読の日として、瑞木小家読の取り組みを重点的に進め、家族の絆づくりに役立てている。その推進を通して、良好な人間関係づくりやいじめの防止等のための保護者の役割について啓発を行っている。

「進んで運動する子」では、体育授業の充実や週1回のさわやかタイムの取組の工夫、各種大会への積極的な取組により、運動好きな児童を育成している。また、生活習慣チェックや栄養教諭と連携した食育の充実により、健康習慣の定着にも努めている。

このような取組を基盤とし、平成25年度のいじめ防止対策推進法の第2条「いじめの定義」が変わったことを踏まえ、本校においてもいじめの理解をさらに深め、「いじめはどの子にも起こりうる」「いじめは卑怯な行為である」「いじめは絶対に許さない」という意識を持ち、いじめの防止、早期発見、対応が計画的に行われるよう、講ずるべき対策の内容を以下に記載する。

1 いじめの防止等対策に関する基本理念

いじめは、全ての児童に関係する問題である。いじめの防止等対策は、全ての児童が安心して学校生活を送り、様々な活動に取り組むことができるよう、学校の内外を問わず、いじめがなくなるようにすることをめざす。

また、全ての児童がいじめを行わず、いじめを認識しながら放置することがないよう、いじめが、いじめられた児童の心身に深刻な影響を及ぼす許されない行為であることについて、全ての児童が十分に理解できるようにする。

さらに、いじめの防止等対策は、いじめを受けた児童の生命・心身を保護することが特に重要であることを認識し、学校と家庭、教育委員会その他関係者連携の下、いじめの問題を克服することをめざす。

また、策定された学校いじめ防止基本方針は、ホームページへの掲載により保護者や地域住民に公表するとともに、入学時に説明・周知するものとする。

さらに、学校評価の評価項目に学校いじめ防止基本方針に基づく取組の実施状況を位置付け、その評価結果を踏まえ、学校におけるいじめの防止等のための取組の改善を図っていく。

2 いじめの未然防止

いじめの防止に当たっては、発達の段階に応じて、児童がいじめの問題を自分のこととして捉え、考え、議

論することにより正面から向き合うことができるよう、実践的な取組を行う必要がある。その際、

- ・いじめは重大な人権侵害に当たり、被害者、加害者及び周囲の児童に大きな傷を残すものであり、決して許されないこと。
- ・いじめが刑事罰の対象となりえること、不法行為に該当し損害賠償責任が発生し得ること。についても触れ、人権を守ることの重要性やいじめの法律上の扱いについても学ばせる。

人間力を高める道徳教育の充実

- ・特別の教科道徳の授業では、児童の心が揺さぶられる教材や資料を取り扱い、人としての「気高さ」や「思いやり」「心づかい」等に触れさせ、自身の生活や行動を省みる。
- ・教育活動全体を通じ、「卑怯な振る舞いをしない」「いじめをしない」「いじめを見過ごさない」という人間性豊かな心を育てる。
- ・特別の教科道徳の授業時間に「B 主として人との関わりに関すること」の「親切、思いやり」「友情、信頼」「相互理解、寛容」に係る内容を扱い、話し合い、考え、議論することを通じ、いじめをなくそうとする意識を高める。
- ・学校公開日には、全学級が道徳授業を公開し、保護者・地域の理解を深める。

豊かな体験活動の充実

- ・学校行事や児童会活動を通して、友達と協力し、交流を深め、集団的達成の喜びを実感させる。活動により、自己存在感や充実感が得られるよう工夫改善を常に図っていく。
- ・福祉体験、ボランティア体験、職業体験、勤労生産体験等、学年に応じた活動を教育計画に位置付け、実施する。

児童会主体の取組

- ・毎朝、保護者や地域の方々、教職員と一緒に「あいさつ運動」を実施し、明るい気持ちで学校生活がスタートできるようにする。
- ・あいさつの合言葉「あいさつは きもちをこめて あかるいこえて じぶんから あきのあじ」を児童会中心に考え、呼びかけ、全児童が元気にあいさつできるようにする。

意識の啓発

- ・11月に児童集会「いじめ撲滅集会」を開催し、「いじめ撲滅宣言」を行う。
- ・11月に人権教育週間を設け(2週間)、生命尊重の精神や人権感覚を育む。
- ・人権標語、人権作文等の取組により、人権意識の高揚を図る。

3 早期発見のための対策

いじめの解消は、いじめが発生した場合の早期発見がポイントである。けんかやふざけあいであっても、見えないうちに被害が発生している場合もあるため、背景にある事情の調査を行い、児童生徒の感じる被害性に着目し、いじめに該当するか否かを判断する。また、いじめは、大人が気づきにくく判断しにくい形で行われることを認識し、些細な兆候であっても、いじめではないかとの疑いを持って、早い段階からの的確に関わりを持ち、いじめの積極的認知に努める。

日常的なコミュニケーションの充実

- ・教職員は、朝の健康観察や帰りの会、授業などの時に児童に積極的に言葉がけをして児童とのコミュ

ニケーションを図り、児童の小さな変化を見逃さないようにする。

- ・生活アンケート(いじめ防止アンケート)を実施して、児童生徒の実態把握と適切な指導に努める。
- ・気になる児童については、その子の様子に目を配る。休み時間や昼休み等、児童の様子に目を配り、「児童生徒がいる所には、教職員がいる」ことを目指す。

教育相談の実施体制

- ・児童及び保護者が相談を行うことができるよう、教職員と児童の信頼関係を築き、次の通り相談体制を整える。
 - ① いじめ相談窓口(教頭及び生徒指導主任)
 - ② 第1教育相談室、第2教育相談室、第3教育相談室との連携
 - ③ スクールカウンセラー等の活用
 - ④ 授業参観日や保護者懇談会を通じた保護者との連携
 - ⑤ 教育相談日の設定
 - ⑥ 児童の相談窓口(ハートポスト)の設置
- ・「生活アンケート」とその後の追跡調査を行い、必要に応じて教育相談を実施する。

校内研修の実施

- ・児童理解に関する研修やいじめ防止等のための対策に関する研修を年間研修計画に位置づけ、教職員の意識啓発を図るとともに、児童同士・児童と担任との絆を深める学年・学級経営を充実させる。

インターネットを通じて行われるいじめに対する対策

- ・インターネット等を通じて行われるいじめを防止するとともに、効果的に対処できるようにするために、教職員(児童、保護者)を対象に情報モラル研修会(講習会)を実施する。
- ・ネットマナー等に関する講師を招聘し、保護者対象の「親の学習」を開催する。

自然災害被災児童等へいじめに対する対策

- ・自然災害などで被災・避難している児童については、児童への心のケアを適切に行い、細心の注意を払いながら被災児童に対するいじめの未然防止・早期発見に取り組む。その他、特に配慮が必要な児童についても、その特性を踏まえた適切な支援を日常的に行うとともに、保護者との連携、周囲の児童に対する必要な指導を組織的に行う。

外国籍の児童に対する対策

- ・海外から帰国した児童や外国籍の児童、国際結婚の保護者をもつなどの外国につながる児童は、言語や文化の差から、学校での学びにおいて困難を抱える場合も多いことに留意する。それらの差からいじめが行われることがないよう、教職員、児童、保護者等の外国人児童等に対する理解を促進するとともに、学校全体で注意深く見守り、必要な支援を行う。

4 いじめの対応

教員は、些細な兆候や懸念、児童からの訴えを抱え込まずに、また対応不要であると個人で判断せずに、報告・相談し組織的に対応をする。その際、被害児童を徹底して守り通すとともに、加害児童に対しては、人格の成長を旨として、教育的配慮の下、毅然とした態度で指導する。

また、好意から行った行為が意図せずに相手を傷つけたが、すぐに良好な関係に戻るような場合は、「いじ

め」という言葉を使わずに、柔軟な対応をする。ただし、この場合も法が定義するいじめに該当するため、いじめ防止対策推進委員会において情報を共有する。

適切な実態把握

- ・当事者双方、周りの児童生徒から個々に聴き取り、情報を収集する。その際、複数の教員が立ち会うこととする。
- ・いじめられた児童が不利な状況にならないよう特に配慮する。

組織的な対応

- ・いじめの事実が確認された場合は、学校として事実の共通認識、対応の共通理解を図り、組織的に対応する。
- ・いじめを発見したときには、学級担任だけで抱え込むことなく、校長以下指導体制を整え、的確な役割分担をして解決にあたる。

いじめの解消

いじめが「解消している」という状態とは、少なくとも次の二つの要件が満たされている必要がある。

- ①いじめに係る行為が少なくとも3ヶ月間止んでいること
- ②被害児童が心身の苦痛を感じていないこと
(被害児童等に対し、心身の苦痛を感じていないかを面談等により確認する)

児童への指導、支援

- ・いじめられた児童の保護、心配や不安を取り除く支援を行う。
- ・いじめを行った児童に対して、いじめられた児童が苦痛に思っている言動や行為を即刻やめさせる。相手の苦しみや痛みに関心を寄せる指導を十分に行うとともに、「いじめは決して許されない」という人権意識を持たせる指導をする。

保護者との連携

- ・いじめられた児童及び保護者に対する支援を行い、具体的な対応策を説明する。また、いじめを行った児童の保護者と面談し、再発防止のための策を講じる。
- ・インターネット等によるいじめに対しては、保護者の協力を求め、学校との連携について協議する。

関係機関への報告・相談

- ・必要に応じて、教育委員会への連絡・相談を行うとともに、事案によって関係機関との連携を行う。(吉川警察署、越谷児童相談所草加支所・三郷市子育て支援課等)

5 校内組織

「いじめ防止対策推進委員会」の設置

いじめの防止等を実効的に行うため、「いじめ防止対策推進委員会」を設置する。

〈構成員〉校長・教頭・主幹教諭(教務)・生徒指導主任・養護教諭・教育相談主任・学年主任

〈活動〉

- ① 早期発見に関すること。(教育相談等)
- ② 未然防止に関すること。
- ③ 対応に関すること。
- ④ いじめが心身に及ぼす影響、その他いじめの問題に関する児童の理解を深める取組。

〈開催〉

月1回を定例会とし、いじめ事案発生時は、緊急開催する。重大事案の場合には「緊急いじめ対応委員会」の設置を決め、その対応にあたる。

重大事案への対処

生命・心身又は財産に重大な被害が生じた疑いや相当の期間学校を欠席することを余儀なくされている疑いがある場合、保護者からの申し出があった場合は、次の対処を行う。

①三郷市教育委員会に速やかに報告する。

②教育委員会と協議の上、当該事案に対する組織「緊急いじめ対応委員会」を設置する。

〈構成員案〉校長・教頭・主幹教諭（教務）・学年主任・生徒指導主任・学年生徒指導担当・教育相談主任・養護教諭・担任教諭・その他校長が任命したもの

③「緊急いじめ対応委員会」を中心として、事実関係を明確にするための調査を実施する。この際、詳細な調査を行わなければ事案の全容はわからないということを第一に認識し、いじめの有無についての判断を軽々に行うことのないようにする。

④「緊急いじめ対応委員会」の調査結果については、いじめを受けた児童及び保護者に対し、事実関係及び必要な情報を適切に提供する。同時に、いじめを行った児童の保護者にも事実関係及び必要な情報を適切に提供し、今後の対応について、協議する。

⑤「緊急いじめ対応委員会」は、調査結果及び再発防止策について、三郷市教育委員会に報告する。

⑥当該学年、学級の他の児童に対する心のケアを行う。

本年度の重点及び改善策

本件を非常に重く受け止め、いじめを早期に発見し、解決できなかったことにより重大事態に至ったことに対し、学校として強く責任を感じている。

二度とこのようなことが起きないように、いじめの未然防止やいじめが起きてしまった場合の早期発見・早期対応について学校の体制づくりを再確認するとともに、具体的に次の項目について実施する。

1. 校内いじめ防止対策組織、生徒指導体制の構築

目標や役割、どのような場合にいつ、誰が、どのような活動をどのように行うのかの計画を策定し、年度当初の職員会議等を通じて、すべての教職員に周知する。

また、いじめの対応の検証から、本案件は、5年生から始まっていて、この時の対応は担任や学年の対応のみに終始し、組織的な検討と対応は不十分であった。そのため、定期的に生徒指導部会を開催し、情報共有と組織的対応への意識を高めていくようにする。聞き取りについても二人体制で聞き取りを行う等、組織的な対応を行う。まずは、学年内で情報共有をしっかりと行い、その後生徒指導主任及び管理職への報告という流れを教員一人一人が把握するとともに、いじめの情報を大小にかかわらず、報告と対応について情報を共有する。管理職は、いじめの対応について、事態の把握を行い組織的に対応するために教育委員会及びSC、SSW、スクールロイヤーとの情報共有及びコーディネートを行う。その上でリーダーシップを発揮し、体制を整えるようにする。

2. いじめに関する法文やガイドライン等についての理解を深める

本件は、管理職及び各教員らの「いじめ重大事態」に対する認識が十分でなかったことやいじめの認識をした後の対応が甘かったことが問題解決を長引かせた要因となった。

そこで、学校の「いじめ防止等のための基本的方針」など、いじめの未然防止・適切対応に関する重要な文書については、毎年度、全教職員参加のもとで点検・見直しを行い、教職員のいじめに関する認識の向上を図る。また、教育委員会の協力の下に「三郷市いじめ問題対応資料集」を用いた研修を行う等して、教員の知識と意識レベルを向上させる。

そして、学校として、いじめに取り組む姿勢や考え方、実際の活動の様子等を保護者会や学校運営協議会等の場を通じて保護者や地域社会に向けて積極的に発信するなど、学校の対策についての理解を得るための手立てを講ずる。

3. 自分のよさや頑張りを認める機会をつくる

本件は、子供同士のかかわりや人間関係を構築する上で、適切な言葉かけなどの配慮が少なかったことも原因の一つと考えられる。そこで、まずは、自分に自信を持ち、仲間とかかわることができるようにするための取組を行う。具体的には、定期的にほめほめにつこりデーを設定し、自分の頑張りを振り返ったり、保護者や担任から認めてもらったりすることで自信がつくようにすることで成功体験を積み重ね、自己肯定感が高まるようにする。また、1か月に一度業前の時間にSST（ソーシャルスキルトレーニング）タイムを設定し、発達段階に応じて人間関係スキルについて学べるようにする。

上記の改善策や再発防止策を講じることに加えて、その実効性を自ら評価・検証することにより持続可能な取組を行う。さらに、児童の自己肯定感を学校全体で育むことを重点として、子どもたちの感性を豊かに育み、いじめの重大事態が再び発生することのないよう全校を挙げて取り組んでいく。